現役生時代の思い出と現役生へ一言

第 3 期 OB　中村 満隆

大学を卒業してもうすぐ丸 7 年が経ちます。学生時代を振り返って 1 番心に残っていることはと言えばやはり 3，4 年の大半の時間を過ごしたゼミ活動です。私は当時，「せっかくやるなら第三者から明確な評価を受けるものに携わりたい」という思いで，電通論文チームに入ることにしました。できあがったチームのメンバーは「全員大雑把な男性」且つ「優秀なキャラ不在」という先が思いやられる 5 名で構成され，オフィシャルな場での初陣であった夏合宿での第 1 回中間報告では，ぶっ飛んだ 2 期の電論チームの先輩方をして「お前らヤバくない？」といわせしめるほどの散々なものでした。

しかし，「2 位だった 2 期に負けない成績を収めたい」という思いだけは強かったメンバー一同は合宿から帰った翌日から，毎日各々が独自の考えを紙に出力して集合することをノルマとし，随所で小野先生の「神の一声」ならぬ「神の億声」をいただきながら着実に前進し，最後は睡眠不足でイライラして時には険悪なムードになりながらも見事に 1 位を獲りました。授賞式後，チーム結成時に片目を入れた達磨のもう一方の目を缶ビール片手に入れた時の感動を一生忘れることは無いでしょう。

先日，なぜかふと当時書いた論文を読んでみようと思い，目を通すことがありました。テーマは「多メディア時代における地域に密着した広告とは」でした。改めて今読んで見ると，当時斬新だったであろう私達の論文の内容が，現在はスマートフォンを活用して当たり前のように行われているマーケティング手法であることに気付きました。自分達が 8 年前に書いていたことが現実になっていることが嬉しかった半面，学生時代は「1 位になるなんてイケてる内容だなぁ」と思

懐かしい電論表彰式での 1 ショット（小野ゼミ HP より拝借）

っていたことが当たり前になっていることに寂しさのような感覚を覚えました。

親戚の結婚式にて家族で撮った 1 ショット

ただ，一方で社会人になって丸 7 年近く経つ今でも小野ゼミ時代に培ったことが活きていると思う瞬間は多々あります。その中でも 1 番強く感じていて，現役生の皆様にも少しだけ頭の片隅に入れながらゼミ活動を頑張っていただきたいなと思うことがあります。それは，「社会人になってから何か困難な物事が起きた時に，本当に自分を奮い立たせてくれるのは第三者からの優しさや励ましの言葉ではなく，過去に頑張った自分自身の経験である」ことであり，「小野ゼミはその経験を学生時代に積むことができる貴重な場である」ということです。社会人になると自分の言動に責任が大きくなるのと共に，多くの人にとっては自分の考えがなかなか受け入れられない際や，自分が予想していた評価を得られない際のショックも学生時代よりはるかに大きくなるでしょう。そんなとき，落ち込みながらも再び強い精神力を自分に持たせ，前を向かせてくれるのは，他の何でもなく自分自身が過去に何かを必死でやり遂げた経験です。その経験こそが「あの時できたから自分はまた必ずできるはず」と自分自身を奮い立たせてくれる唯一の起爆剤だと思います。そして，自分にとってそれは大学 3，4 年生の頃の小野ゼミでの日々に他なりません。

私もまだまだ偉そうなことを言えるような立場ではありませんが，能力が高くても叩かれると弱い人間より，能力がそれほど高いわけでなくても，自分の意思を強く持ち，その思いを叩かれても「何としても実現させてやろう」と何度も這い上がって来る人の方がはるかに魅力的だと感じますし，自分が見た大成している人には共通してそのような意思や精神的な強さを人一倍感じます。

だから，現役生の皆様も小野ゼミで今やっていることを時々（いや，頻繁に？）苦しくなってしまっても全力でやりきって下さい。それが将来社会に出ても活躍できるだけの強い意志と精神力を身に付けることに繋がりますし，小野ゼミはそれを培う最良の場であると言いきれます。

これからも今自分がやっていることを信じて頑張り抜いて下さい。